

3. オリゴメタに対する臨床試験の新展開

白井 克幸 / 福田友紀子 / 遠藤 雅士 自治医科大学附属病院放射線治療科

オリゴメタ（以下、オリゴ転移）とは、原発巣以外に1個あるいは少数個の他臓器への転移がある病態を指し、その疾患概念は1995年にHellmanらにより提唱された¹⁾。一般的には、遠隔転移の治療では全身化学療法が主体であるため、オリゴ転移のように転移の個数が限られている状態であっても、局所的な治療により予後が改善するかは長らく疑問視されてきた。近年、オリゴ転移に対する定位放射線治療により、予後が改善するという報告が複数報告され、2020年より本邦において、「5個以内のオリゴ転移に対する定位放射線治療」が保険適用となった。本稿では、最新のオリゴ転移に対する放射線治療の成績や、今後の展開について概要を説明する。

オリゴ転移に対する randomized phase II 試験

肺がんを中心に、オリゴ転移に対するrandomized phase II 試験が複数報告され、放射線治療、特に定位放射線治療の有用性が明らかとなってきている^{2)~4)}。

Gomezらは、IV期非小細胞肺癌において、転移個数が3個以内のオリゴ転移病変で、化学療法による3か月以上のstable disease（以下、SD）を維持している症例を対象としたrandomized phase II 試験を報告した²⁾。報告では、化学療法による維持療法を継続する群（25症例）と、維持療法に加え転移病変に対する局所治療（手術、定位放射線治療、通常分割照射）を追加した群（24症例）とを比較した。局所治療群では全生存期間中央値は41.2か月、維持療法群では17か月であり、局所治療により有意な全生存率の改善を認めた（ $p = 0.017$ ）。続いて、Iyengarらは、IV期非小細胞肺癌において原発を含め6個以内のオリゴ転移症例で、4~6コース以上のプラチナ製剤併用療法でSDを維持している症例を対象に、randomized phase II 試験を報告している³⁾。報告では、化学療法による維持療法を継続する群（15症例）と、転移病変に対する定位放射線治療を追加した群（14症例）とを比較した。無病生存期間中央値は、定位放射線治療群で9.7か月、維持療法

群で3.5か月と、定位放射線治療により有意に無病生存期間の改善を認めた（ $p = 0.01$ ）。Palmaらは、IV期の固形がんにおいて転移個数は3臓器、5個以内のオリゴ転移病変で、標準的な化学療法で3か月以上のSDを維持した症例を対象に、randomized phase II 試験を行った（SABR-COMET 試験）⁴⁾。SABR-COMET 試験では、化学療法による維持療法を継続する群（33症例）と、転移病変に対する定位放射線治療を追加した群（66症例）とを比較した。全生存期間中央値は、定位放射線治療群で41か月、維持療法群で28か月であり、定位放射線治療群で全生存率が良好である傾向を認めた（ $p = 0.09$ ）。

これらの比較試験で共通していることは、初発でオリゴ転移状態である“synchronousオリゴ転移”を対象としており、まずは化学療法を行いSD以上の効果が得られた症例に対して、化学療法のみを継続する群と、化学療法に局所治療を併用する群を比較している点である。いずれの試験でも、オリゴ転移に対して局所治療を追加した群で、全生存率や無病生存率の改善が報告されている。これらの試験では、局所治療としては主に定位放射線治療が使用されており^{2)~4)}、本邦でも2020年に5個以内のオリゴ転移に対する定位放射線治療が保険適用となった。

オリゴ転移の診断については、明確な基準は存在しないが、近年、EORTCは、将来的に、オリゴ転移を対象とした臨床